

European Living in Japan

日本で活躍するヨーロッパ人

The Spirit of the Japanese Way of Tea Lives on
in this Polish Woman

茶道の精神を受け継ぐ ポーランド人女性

豊かな自然と歴史に育まれた京都の地に、茶道を学ぶための日本で唯一の学校がある。ポーランド人のウルシュラ・マハさんは、茶祖千利休の流れを汲む裏千家が設立した裏千家学園茶道専門学校に通う学生だ。初めてお茶を体験したのは8年前のワルシャワ。いろいろな出会いと経験の末、マハさんは「お茶のプロになる」決意を固めて京都にやってきた。



着物姿でたたずむマハさん

「曼荼羅」を読み解く

長い髪をひとつに結び上げ、淡い栗色の着物を身にまとい現れたマハさんは、やや小柄なせいか、驚くほど自然なたたずまいを見せていた。似合いますね、と褒めると「洋服を着ることを考えると、このなで肩が不便なところもありましたけれど...」とうつむき加減にはにかんだ。

「茶道は日本文化に根ざしています。でも、客を招いてもてなす、という茶道の基本的な考え方は、世界の誰にでも通じるものですし、人間関係を大事にすることに気づくのはすごく重要なこと」と語る彼女は、常に異なる文化間の共通点をさぐり、離れているものの融合を図ることに興味を持ってきた。

ワルシャワで生まれ育った彼女は、ワルシャワ大学で修士号を取得し、現在は同大学の博士課程に籍を置いている。修士論文には仏教絵画「曼荼羅」をテーマに取り上げた。

「一般の西洋人にとって曼荼羅は、きれいだなという印象は持っても、遠く離れた世界のもの。ところが、そこに含まれている『人間はどこから来たか、どんな目的と使命を持っているか』という質問への答え方、『宇宙』と『生きる意味』の説明の仕方を少しずつ解釈してみれば、大勢の人が興味を持つようになると思います。私は、西洋と東洋の間には違いだけではなく、共通点がたくさんあるんだ、ということの説明したかったんです」

「日本思想・宗教」と「美術史」という2つの専門分野をまたぐ難しいテーマだったが、努力の甲斐あって、論文は大学から高く評価された。最近、書籍として出版したい、という依頼が舞い込んできたが、出版のための加筆作業は「日々が忙しくて」なかなか進んでいない。

そもそも日本に興味を持った理由は2つある。親戚に、1980年代にシベリア鉄道を経由して、日本まで禅の勉強をしに来たというユニークな2人の叔父がいたこと。そして、美術好きなマハさんが、高校の世界美術史の授業で初めて日本の美術に触れた時に、「何もない空間にも意味がある」といったヨーロッパ美術にはない美学を、どのような人たちが生み出したのかに強い好奇心を持ったこと、だ。

茶 道との出会い

マハさんが初めてお茶と出会ったのは、ワルシャワ大学の学部生だった1998年。行動的な彼女は、さっそく日本から戻ってきた留学生が始めた茶道のグループに入り、基本的な作法を勉強した。

2000年に日本語と仏教史・仏教美術史を学ぶために交換留学生として同志社大学にやってきたマハさんは、そこで、大阪に住む茶道教授、杉本宗苑先生にめぐり合った。すでに美術や宗教、文化などの関連する知識を身につけていたマハさんは、茶道を本格的に学ぶため、1～2週間に一度、京都から大阪までお稽古に通うようになった。

当時を思い出してマハさんは、「最近、初めてお茶の稽古に出た人が『お稽古の雰囲気は、閉鎖的で、作法も知らずに窮屈だったはずなのに、なぜだかリラックスできたんです』と言っていたのを聞いて、そのころの自分も同じように感じていたことに感動しました」と語った。

1年後に帰国してからは、ワルシャワで茶道の紹介や普及活動に携わった。

OLから茶道修業者へ

2003年に修士課程を修了したマハさんは、当時ポーランドに進出しようとしていた日本のコンピュータ関連企業に就職することに決めた。「インタビュー



お茶席にて：
(上：左から)花を生け茶室をしつらえる → お道具を用意する → 帛紗をさばく →
(下)お茶をたてるマハさん

は電話だったのですが、その時、IT(情報通信)の話に加えて法隆寺の話も出ました。就職後はまずニューヨークに行き、そして2004年に東京にやってきました。1年余り、バイリンガル・システムエンジニアへの道を歩んでいましたが、そのうち自分は、ITの世界より芸術の世界に入った方が、他人の役に立つと思うようになり、その決心を上司に伝えたところ、休職を認めてもらったのです。まるで、会社の上司に茶道学校に送られたような気がします。そうして、会社で習ったことに感謝しながら、東京でのせかせかした生活を止めました」。

裏千家学園には茶道の海外普及を目的とした海外留学生受け入れ制度がある。各国にある支部から選抜された留学生に、茶道の中心地、京都で1年間研修してもらうというものだ。特別にこの制度での入学を許可され、マハさんは京都にやってきた。「友人からは、あまり実用的な道ではない、と言われたこともありましたが、人間は自分の運命に背くことができない時があるんです」。マハさんは、茶道をポーランドの人々に伝えていく、という自分の役割に目覚めていた。「欧州連合(EU)に加盟して、ポーランドはどんどん変わってきています。お茶もポーランドの人々の生活に入ってくるようになりました。すでにポーランドでお茶の稽古を熱心にやっている人たちの力になれば、と思います。

そして、人に教えるからには、基礎をしっかり勉強したプロになろうと思ったのです」。

学校へは毎日着物を着て行かなければならないことに加え、1～1カ月半に1週間、水屋当番という掃除などの裏方の仕事が回ってくる。最初は1時間半近くかかっていた着付けは、20分で出来るようになったが、それでも水屋当番の日は朝4時半に起床することもある。「水屋当番は大変な部分もありますが、先生いわく『お茶は努力』。私たちはこの努力のためにここに来ていますから、時々愚痴を言うことはあっても、結局は楽しくやってしまいます」。1年後、優秀な成績を残したマハさんは、講師を目指す別科への編入が許された。

古き良き人とのつながりを大事にするお茶

「お茶は、形式にこだわって決まりごとが多いと敬遠する人も多いでしょう。その一方で、お茶を深く追及したがる人もいます。難しいと思いますが、その人に応じた教え方を見つけるのは、教える側の責任になってくると思います」。間口は広く、奥は深く、というのがマハさん流のお茶となっていくのだろう。「哲学、美術鑑賞、食、華道、書道、建築などあらゆる分野を網羅する芸術は、現代では茶道をおいてほかにはないでしょう。

お茶に出会うきっかけはいろいろなんですが、1回心が通じたら、一生の勉強、一生の自己訓練になります」。

現在通っているコースを修了すれば、教授者として第一段階の資格が取得できる。マハさんは、来年はいったんポーランドに戻り、茶道を教える土台づくりに取り組むつもりだ。そして博士論文では、「芸術論から見た茶道と哲学・宗教から見た茶道、この2つの見方を融合したもの」を書きたいという。

「茶室の中では、人間は財産や仕事による上下関係はありません。そこで欲や我を捨て無心に点てたお茶を飲んでもらい、素の人間どうしがつながっていきけるところが、お茶の一番好きなところですよ」——。インターネットやEメールで瞬時に誰かとつながれる時代だからこそ、非日常的な空間の中で心を落ち着けて人間どうし向き合うことが大事、とマハさんは伝えたいのだろう。

マハさんの茶道指導教授は、「常に礼儀正しく、人のために何かをしてあげるといふ茶道の精神をしっかり持っている人で、優れた理解力のある素晴らしい人材。ポーランドでの普及も大事だけれど、帰したくない、というのが本音です」とこれからの彼女の活躍に期待している。



Urszula Mach
ウルシュラ・マハ

学校法人裏千家学園茶道専門学校学生

ポーランド、ワルシャワ生まれ。高校の美術教育コースを卒業後、1996年、ワルシャワ大学新文学部日本学科に入学。文化研究修士号を取得し、2003年同大学東洋文化学部博士課程に進む。2000-01年、京都の同志社大学に留学。03年、日系のIT関連会社に就職し、04年より日本に在住。05年4月、学校法人裏千家学園茶道専門学校に入学、06年4月より別科に在籍。